狭衣物語

下〈蓮空本〉

吉田幸一編

古典文庫

狭衣物語

下〈蓮空本〉

吉田幸一編

古典文庫

古典文庫第97・100冊

昭和三十年十一月廿日　印刷發行
昭和五十六年九月二十日再版發行

非売品

語物
(蓮空本)
<下>

編者兼発行者　吉田幸一

印刷者　帝都印刷製本株式会社

発行所　114　東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九一一四五九七番

不許複刻

凡　例

一、古典文庫本の一として「蓮空本狹衣物語」四卷を飜刻する。

（この凡例は卷三・四に適用するものである。）

一、狹衣物語は異本の種類が多く、系統的には各卷別に三種乃至四種に大別できるけれども、室町時代以前の諸寫本は如何なるものでも相互に異同のない寫本はないといつてよい程である。こゝに飜刻を試みる蓮空本も亦異本中の一本である。

一、蓮空本は、蓮空自筆の卷一、二を傳へ、卷三、四はその轉寫本を傳へてゐるが、本書は書寫年時（明應六年――七年）を明記してゐる傳本としては最も古いもので、現存の蓮空本の傳本は左の通りである。

（一）蓮空自筆本　卷一、二　（竹柏園舊藏）　天理圖書館藏

（二）金澤大學本　四　冊　（舊四高藏）　金澤大學法文學部藏

（三）學習院大學本　四　冊　（金澤大學本の影寫本）　學習院大學國文學研究室藏

（四）大　島　本　卷　一　〔蓮空自筆本　卷一の寫〕　小汀利得氏藏

一、本書は、卷一・二は蓮空自筆を、卷三・四は學習院本を底本とした。

一、本書は、底本本文を忠實に飜刻することに努めたが、印刷上の都合を考慮して左の如き私意を加へた。

イ、漢字の草體・假名の異體字等は通常の活字體に統一した。しかし假名遣の誤などは原文のまゝとした。

ロ、適宜に章段を設け、和歌は別行二字下げとし、歌には順番號を下に附した。

ハ、濁點、句讀點、會話符號「　」等を新たに施した。

ニ、底本における見セ消チは、墨のミセケチを＝符號で、朱のミセケチを一符號で示した。

ホ、誤寫、誤脫と思はれる不審箇所には、右傍に（マヽ）として原文のまゝを示し、又意味上斯くあるべしと思ふものには、右傍に（〇〇カ）として私案を記した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

へ、原文に於ける書入傍書は6号活字でそのまゝ飜刻し、朱の書入（巻三、四）は6號ゴジック活字で示した。

一、巻三、四公刊に就て、種々御世話になつた學習院大学松尾聰氏の御厚情に対し謝意を表します。

昭和三十年五月二十五日

吉田幸一

さごろも　巻三〔蓮空本〕

み山のさとのさびしさは、げにさをしかのあとよりほかのかよひぢもまれなりけるを、いとゞ夜のほどにとぢかさねけるこほりのくさびは、ふみくだかるゝあしもいみじく。て、あゆみもやられず、そこひもしらずふかきたによりおひいでたる木どものねに、こけがちにうち物ふりたる氣色、枝ざしなどうとましげなるに、くるしくて、よりゐさせ給へる御かほの色あひけしきなど、山中にもめとゞめたてまつる物やあらんと、ゆゝしきまでみえ給ふ。

たにふかみたつをだまきは我なれや思ふ心のくちてやみぬる

七四

れいのことにふれて、まづおぼしいでらるゝに、やがてこれより山ふかくもいらまほしきに、いとうしろめたくわりなしとおぼしたりし御けしきどもの、思いでられさせ給て、いつしかとまちおぼすらんに、行ゑなくきゝなし給て、いかばかりおぼしまどはんと、思やらるゝあらましごとに、あぢきなく涙もおちぬべきに、又うちそへて、おもはずにうしとおぼしたりしおり〳〵の御氣色は、をしあけがたの月ならねども、よろづにすぐれて戀しく思いでられ給に、いとゞ道みえぬまでかきくらされ給ぬる。（マヽ）

戀しさもつらさもおなじほだしにてなく〳〵もなをかへる山かな　七五

高野より大將かへり給事

など、こと〳〵なき御心のうちなめり。からうじて、しも山にあゆみつき給ぬるに、いつしかとたてまつらせ給へる御むかへの人〳〵、ま

ひりあつまりたる（さるへき）わかきかんだちめ、殿上人などは、をくらかさせ給にけるうらめしさのかはりに、われも〳〵ときおひいで（ほカ）ゝ、よし野河ところもなきまで、心あはたゞしくなりぬれど、ありし山ぶしのけさたづねさせ給へれど、ものさはがしくて、えあひ給はずなりぬれば、かならずたづねまかりあへとて、みちすゑをとゞめさせ給へる、まち給とてやすらひ給に、からうじてまいりたれば、人なきかたにめしてとひ給へば、「この比さぶらひつる所もとりはらひ、かみしやうじに、夜べの御ぞをなんかけてさぶらひつる。こもりて侍る僧にとひ候つれ（サフラヒ）ば、『いもうとの月比わづらひ侍りけるが、かぎりになりたるよしつげつかはしたれば、世のあひだとぶらはん。もししなば、あつかひも（に脱カ）（夜カ）（きカ）又みゆづるべき人もなきを、いかゞすべからん。よろしげならばやが

てかへりなん』と。申て、夜中にまかりいでにけり。その行ところなどしりたりしと申人。はず「と申に、「くちおしなどもよのつねなりや。よべなどいますこしとはずなりにけん。あか月にめせ」といひしかば、心やすくおこなひし、まぎらはしう、人めもいかゞなど、心のどかに思しもくやしう、いみじともよのつねの事をこそいへ。いとゞ都のかたの物うさもわりなけれど、「いでさせ給にしのち、とのもすべて御ゆもめさず、よるつゆばかりも御とのごもらせ給はでなん、おぼつかながりあかさせ給ける」とくち（くちノ上、墨ニテ「人」「〈〈」ト重ネ書ケリ。）かたりつゝ、申「とく〈〈」といそがし申せば、心にあらずたなゝしを舟にこぎかへり給程、なをむねのせきぢはひまもなし。ふえなどももたせたるわかき人〈〈もありて、おりにあひたるね、吹ならしたり。水のうへにて

はいとゞおもしろくをかし。又かひのしづくのしほどけさもしらずがほに、づから（て脱カ）こぎかへりつゝ、あそびそぼれ、こゝはおかしくて、「あはれいもせ山、さばれ」とうたひたはぶるゝさまどもゝ、をの〳〵ほこりかに、おもふ事なげなるは、なをわればかり物おもはしきはなきなめりと、うらやましくみわたされたまふ。

行かへり心まどはすいもせ山おもひはなるゝみちをしらばや　左

とのみながめいり給て、ことにものの給はず。「あなくるしや。いみじくこそねぶたけれ」とて、舟のはたによりかゝりて、ねぶり給へる御まみのけしき、いひしらずなまめかしくめでたくみえ給ふを、物このましき若上達部などは、めでたうのみみたてまつるに、事ずくなに、しづまり給て、もの心ぼそげなる御けしきを、なをいかなる御心

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

の中にかと、すみだがはらのちどりにも、とはまほしかりける。（マヽ）
殿には、ゆゝしきまで戀きこえさせ給ければ、うちみつけさせ給へる
うれしさのかぎりなきにも、とゞめがたげなる御涙のけしきをみたて
まつらせ給には、たはぶれにもわが思よるすぢは、あらまじき事かな（るノ誤カ）
とおぼししるべし。ゆきけに御あしもはれてなやましくおぼさるれ
ば、ゆでつくろひなどして、ありきなどもし給はず。けざやかなりし
ほとけのかほのみ戀しく、面影にいでられ給ふにも、なをいかでか、
この世をさまあしからぬ様にていとひはなれなんと、心の中ばかり
には、ありしよりけにあくがれまさりて、おこなひにのみ心は入給へ
れど、さい院にはえおぼつかなき程にもなし給はず。さるはへだてな
くみたてまつる事さへありがたくなりにたるに、この世いとはしさも

よほされ給ふべし。

思わびつゐにこの世をすてつゝともあはぬなげきは身をもはなれじ（たモ）あな心うや。この心ながらは、のちの世もいかゞとうしろめてし。さてもあはれなりしあしせんをさへまどはし給てしくちおしさも、おもひやるかたなきまゝに、かへりきてやあると、こかはに人たび〳〵つかはせど、なしとのみいひつゝかへりまいれば、かのいもうとのさはなくなりにけるにやとおぼす。中〳〵いなぶちのたきは、なぐさめがたくおぼさるゝまゝに、

ありなしの玉のゆくゑをまどはさで夢にもみばやありしまぼろし（七八）いけの玉もとみなし給けん御門の思も、中〳〵めのまへにいふかひなくて、わすれ草もしげりけんを、これはさま〴〵夢うつゝともさだめ

がたう、御心をのみうごかし給は、げにいかなるむかしの契にかとおぼししらる。さは、ありしあかつきのゆふべにやきえはてにけんと、つねよりも御心にかゝりておぼせば、たれとてもなけれど、その程よりむつまじくおぼすそうどもにいひつけ給て、七日〳〵までのとぶらひをば、いみじくしのびてしたまひける。いかなるにても、いまはたゞ、かのしのぶ草ありなしをだにきくわざもがなと、御心にはなるゝおりもなし。

まこと、齋宮はつかさへわたり給にしかば、宮はいとゞ物さびしくてものし給を、大將殿は心ぐるしく思きこえさせ給へど、前齋院の御ひとりずみの心ぼそきにより、さがの院の、なをさながら思うしろみ給へとの給はすれば、大殿へもえわたしきこえ給はで、つねに身づから

わたり給ふ。よるなどもとまりたまふよな〳〵おほかり。わか宮もみなれきこえ給まゝには、いみじくまとはしきこえ給ふを、いかでかおろかには思きこえさせ給はん。やう〳〵すみよしのさとにもなりぬべき御うつくしさなり。いづれもこのひめ宮たちをば、まことのいもせのやうにあつかひきこえさせ給ふにつけても、二の宮のいとひすて給てしつらさも、あかずくちおしくおぼしけり。ありし雪の夜のまくらのしづくは、わすれがたくかなしく思いで給ふ。いまはいかやうにかおぼしなりたるとも、いかさまにしてか、いま一たびけぢかき程の御けはひきくわざもがなと思わびて、中納言のすけをのみぞうらみ給へど、かひなきよしをのみきこふれば、いと心うし。夢のやうなりしよな〳〵も、なき給よりほかの御けはひはきかでやみにき。一くだりの御

返はみすべき物とおぼしたらざりしも、我心のあながちにつくしそめてし一かたよりほかには、なげきのもとにえださしそへじと、せちに思はなれしおりこそ、これをしひてうらみきこゆべき物ともおもはざりしか。よろづにとり所なくくやしき事のつきせぬまゝには、いまさらに日にふたゝび三たび、かきあつめつゝうらみきこえ給ふさま、あまのはまやにもあまりぬべし。されどもみるべき物ともおぼしたらずとのみきくは、すぎしかたのむかひ（くカ）にやと、つらく心うき御身の程といひながらも、我身はなに事につけて、あはれはかけられたてまつるまじう、あさからぬ契のほどをおぼししるまじくやと心うけれど、月日のすぐるまゝに、よにうつくしきさまにをよずけ給ふわか宮の御さまを、さすがによその物とみなし給はず、かく契ふかくて、我物にあ

づかり給へるを、いかでか世のつねにおぼしなさん。これよりほかのうき世のなぐさめはあるまじかりけるにこそと思しられ給。あはれもくやしさも世のつねならず。大臣殿もつねにわたり給つゝ、みたてまつりうつくしみきこえ給ふさまは、おろかならぬにつけても、ありのまゝにきこえ給はゞ、いかにとてやおぼさるゝ。宮のうちもあれたる所〳〵つくろはせなどせさせ給て、さるべき家司しきしなど、わかちなどせさせ給て、こ宮に侍し人〳〵、かたへはさがの院、さい宮などにわかれにしのこりは、さながらさびしからぬさまにとてとぶらはせ給。雪ふりて、物心ぼそげなる夕つかた、大將殿うちよりまかりいで給まゝに、いかに物心ぼそげなるふるさとに、おさなき人、なに心なくまぎれ給らんと思やられ給へば、そなたざまに物し給へるに、おぼしや

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton